

教科書に入った金子みすゞの童謡詩

川崎 節子

A Children's Song Placed in the Textbook

Kawasaki Setsuko

The poetic works of Misuzu Kaneko, who is a poet for children's songs in Taisho era, were published in 1984. Setsuo Yazaki published her poems after 50 years of her death. One of her poems "Watashi to kotori to suzu to" (A bird, a ring and I) is placed in the textbooks. Observing the simultaneous employment of the poem by the four different companies, the author considers the relevance of the current educational ideologies to the interpretations of this poem. *The second report on educational reform*, submitted by The National Council on Educational Reform in 1986, embraces educational objectives such as the fosterage of global perspectives, the assertion of individuality, the understanding of different cultures, and the development of international communication ability. Educational specialists, influenced by these objectives, seem to have spread the perverted interpretations of this poem. The present paper discusses how the current Japanese educational ideologies are reflected in the interpretations of Misuzu's poem, by considering various explanations given in the textbooks and critical reviews. Further, it suggests that the true value of current education rest on establishing independence in the interpretations of reality rather than the superficial diversification.

キーワード 金子みすゞ 教科書 童謡 臨教審

1. 序—2 1世紀のための教育目標と、ある詩人の登壇

(1) 「公共の精神」と「世界の中の日本人」(1984年臨教審)

今日の日本の青少年をめぐる教育状況は、決して明るくはない。学級崩壊・校

言語科学研究第8号 (2002年)

内暴力・いじめによる自殺・ひきこもりなどに対して、決め手となる解決策は未だ打ち出されず模索を重ねている。教室では、子どもはたえずいらいらし、机から消しゴムが落ちたといっっては「むかつき」、得体の知れない者に向かっては腹を立て、同年齢の子とさえも、うまく人間関係を結ぶことができない。総務庁による1999年9月の調査でも、「小さなことでイライラすることが多い」と答えた小学生は35.4%に上り「子どもが何を考えているかわからない」と答えた母親は36.8%に上った。子供たちの不安感や人間らしい気持ちの欠如は、何に由来するのであろうか。この現状に対処できる教育のあり方が、今模索され論議されている。子供を取り巻く環境の変化に教育政策が対応できてないからであるという議論も一部で起きているが、果たしてそうであらうか。これまでの教育政策を振り返って今日の教育目標を検証してみよう。

*

戦後教育の「再編」が国家の政策として推進されるようになったのは1980年代のことであった。戦争の反省の上に立った戦後日本の教育は、平和主義と個人の尊重を基本原則としながら教育の機会均等の実現を通じて成果を挙げてきたが、反面、「団体駆け足行進」型（藤田・1997）と評されるような文部省主導下の画一的教育に対する批判が高まり、進行するグローバリズムの圧力と重なり合って、当時の政府による「教育改革」の政策化をうながした。

1984年（昭和59年）秋、政府は臨時教育審議会（National Council on Educational Reform）を発足させ、1986年（昭和61年）4月に「教育改革に関する第二次答申」（Second Report on Educational Reform）を提出させた。答申の「第一部21世紀に向けての教育の基本的なあり方」では第4節に「21世紀のための教育目標」として次の三つの教育目標を掲げている。

- 一、ひろい心、すこやかな体、ゆたかな想像力
- 二、自由・自律と公共の精神
- 三、世界の中の日本人（『文部時報』1327号、1987.8. p 97）

この中の、「二、自由・自律と公共の精神」では、次のように述べる。

また、従来の教育が画一主義、形式主義に流れ、個人の尊厳、個性の尊重、自主的精神の涵養がなされず、個の確立、自由の精神の尊重等が十分でなかったことを反省しなければならない。

教科書に入った金子みすゞの童謡詩

もとより、自由は、放縦や無秩序、無責任とは全く異なるものであり、自らの内面的規範と自主的判断に従って、自己抑制することのできる高い能力と重い自己責任の意識等によって支えられるものでなければならない。この意味で、ここにいう「自由・自律の精神」とは、自ら思考し、判断し、決断し、責任を取ることのできる主体的能力、意欲、態度等を総括しているものである。

また、個々人は一人で存在するものではないのであって、教育基本法の教育の目的にいう「平和的な国家及び社会の形成者」として責任を果たす自覚を持つことが求められる。このため、公共のために尽くす心、他者への思いやり、社会奉仕の心、郷土・地域そして国を愛する心、社会的規範や法秩序を尊重する精神の涵養が必要であり、さらには、自分とは異なるもの、異質性・多様性への寛容の心などを育成することが必要である。(同 p99)

従来の教育は画一主義、形式主義であり、個性の尊重がなされず個の確立が不十分であったとしながらも、結論としては、平和的な国家の形成者を養成するためには、公共の精神、他者への思いやり、奉仕の心を媒介にして、国を愛する心、社会的規範や法秩序尊重へと導いて行く。明らかに個人の価値よりは、国家や社会による個人の統合の側面が強調されている。その中での役割を認識し調和をはかる人間の育成、なおかつ多文化社会に対応できる国際人への育成をはかっている。

また、「三、世界の中の日本人」には、次のように述べられている。

我が国がいまだかつて経験したことのない国際社会と相互依存関係の深まりの中で、「世界の中の日本人」を21世紀のための目標として掲げることが重要である。(中略) 我が国が、平和と国際協調と相互依存関係の中に生き続けて行くためには、日本人が国際社会において真に信頼されることがまず必要である。そのためには、第一に、広い国際的視野の中で、日本社会・文化の個性を自己主張でき、かつ多様な文化の優れた個性を深く理解することのできる能力が不可欠である。第二に、日本人として、国を愛する心を持つとともに、狭い自国の利害のみで物事を判断するのではなく、広い国際的、地球的、人類的視野の中で人格形成を目指すという基本に立つ必要がある。また、多様な異文化を深く理解し、十分に意思の疎通ができる国際的コミュ

言語科学研究第8号（2002年）

ニケーション能力の育成が不可欠である。（同、p99～100）

ここには、国際社会の中で生きる多様な異文化理解能力を持った人間像が追求されている。しかしそれは、グローバル化の進む国際社会の中で生きる個人の生き方というよりも、国際的視野を身につけ、日本社会・文化の個性を自己主張できる能力を備え、かつ愛国心を持った日本人である。この価値観は国家本位のものである。その意味で臨教審の出した教育目標とは、ナショナリズムの上に立ったmulti-culturalism（多文化主義）である。

（2） 「わたしと小鳥とすずと」（1984・金子みすゞ全集出版）

臨教審がスタートした1984年（昭和59年）、金子みすゞ全集が出版された。その詩はすべて童謡詩であり、その数は512篇にのぼる。以後大手書店の詩の書棚には、彼女のコーナーが設置され、常に幾冊かの詩集と解説書がとりそろえられている。また、彼女の詩は書籍として出版されているのみならず、CDとしても刊行されている。

2000年春、新聞に掲載された6枚のCD広告には、「わたしと小鳥とすずと」の一篇、十行の詩と共に、詩人の肖像が掲載されている。大正時代の髪型と縞模様の着物をまとった二十代のふっくらした面立ちの女性が、半身の姿勢で端然とこちらに顔を向けている。その目はカメラを見ることはなく、どこか決然たる寂寥感を漂わせる。名刺大の詩人の写真の両サイドには、五人の女優によって朗読されCD化された詩の題名が列記してある。その下には「豪華な顔ぶれの朗読陣」と称されて、小林綾子・紺野美沙子・壇ふみ・中井貴恵・宮崎淑子の五人の写真が小さく並んでいる。だが、現代女性である彼女らの屈託のない笑顔は、かえって詩人の肖像の孤独をさらに深めているかのようだ。後に紹介するが、この写真は、自死の前日、覚悟の上で写真館に行き撮影した遺影なのである。

金子みすゞの詩は、全集出版から12年の歳月の後、1996年（平成8年）小学校の国語の教科書に登場する。選ばれた詩は4篇であるが、中でも4社の教科書に採用されたのは、「わたしと小鳥とすずと」の一篇である。教科書編集者たちは、なぜこの詩一篇に大きな評価と執着を示したのか。現代の小学生になぜこの詩が読まなければならないと考えたのか。小学校教育現場では、どのようにこの詩が小学生によって受け止められ、解釈され、意味づけられているのか。

教科書に入った金子みすゞの童謡詩

本論では、第一に、金子みすゞという詩人の「わたしと小鳥とすずと」という詩の解釈、意味づけの中に、現代日本の教育目標である「多様な異文化を理解する能力」や「自分とは異なるもの、異質性・多様性への寛容の心」などの育成がどのようにとりこまれ、詩の解釈の言葉として語られているかを検証する。第二に、教育現場において語られるそうした解釈が、詩の取り扱われ方として正当かどうか疑問を投げかけ、そこに80年代以降の今日の教育政策がどのように影を落としているかを考察する。

2. 掘り起こされた詩と詩人の生涯

(1) 大正の童謡詩人

金子みすゞは、山口県大津郡仙崎村（現在は長門市仙崎）に、1903年（明治36年）に生まれた。本名はテルである。あたり一帯は北長門海岸国定公園に指定されるほど、海岸線と日本海に浮かぶ島々が美しく、中でも仙崎の町の北側には青海島という名の美しい島がある。その島と本土に囲まれた仙崎湾では、明治初期には捕鯨が盛んで、年間10頭もの鯨を捕りに全国から捕鯨船が何艘も集まり、殷賑をきわめた。

この仙崎で、たった一軒の書店を営む家に生まれた彼女は、3歳で実父を失う。彼女が4歳のとき金子家では、1歳10ヶ月だった弟を母親の妹の嫁ぎ先、上山家に養子にやる。15歳のとき上山家に嫁いでいた母親の妹が亡くなる。そのため彼女が16歳のときそれまで寡婦であったみすゞの母親は、自分の妹の夫であった男性と再婚して弟の母となるが、彼女自身は金子家に留まり祖母と共に暮らし、書店の店番をしながら童謡詩を書く。

大正時代は、子どものための芸術的詩である童謡が盛んに書かれた。児童文学の雑誌『童話』『金の星』『赤い鳥』が発行され、『婦人倶楽部』や『婦人画報』という女性雑誌もそのジャンルを扱っていた。そして一般読者から詩の投稿を募集した。金子みすゞは1923年（大正12年）から、これらの雑誌に詩の投稿を始め、『童話』で選者をしてきた西條八十に認められた。1923年（大正12年）から1928年（昭和3年）、20歳から25歳までの間、彼女は512篇の詩を書き、内90篇が雑誌に掲載された。1926年（大正15年）4月号の『童話』では、詩「露」が特別募集第一席になる。

言語科学研究第8号（2002年）

この間、23歳で上山家の書店の従業員であった男性と結婚。一子をもうけるが、夫の放蕩に悩まされ、詩を書くことをやめろと言われ、1930年（昭和5年）2月に26歳で離婚する。夫から罹患した淋病のため歩くことも困難な中で、別れた夫から子どもを引き取るというはがきを送られたことを苦にして、3月10日に自死した。その前日、自死を覚悟して、子どものための形見として撮った写真が、今日メディアを通じて流布されている遺影である。

(2) リバイバルへの道筋

金子みすゞの自死とほぼ時を同じくして、1931年（昭和6年）に満州事変が勃発する。それからの戦争体制の中で大正の童謡ブームも下火となり、彼女の詩が人々の目に触れる機会は失われて行った。しかし戦後1957年（昭和32年）になって、岩波文庫の『日本童謡集』（与田準一編）の中に、詩「大漁」が収録され、それが「再発見」の機縁を作った。「大漁」を読んで感銘を受けた児童文学作家の矢崎節夫が、みすゞの生い立ちや他の作品を探し続け、ついに1982年（昭和57年）金子みすゞの従兄弟を下関に見つけた。その紹介で彼女の実弟と東京で会った矢崎は、彼女の手書きの詩集三冊を貸してもらった。この手書き詩集に心を動かされた矢崎は、同年みすゞの故郷仙崎を訪れ、「金子テル子」と刻まれた墓を見つけた。翌1983年長門市郷土文化研究会の有志と「長門みすゞ会」を結成し、みすゞの資料を共に探し始める。

1984年（昭和59年）2月、矢崎は金子みすゞ全集3巻をJULA出版より刊行する。この全集出版に先立って、当時朝日新聞記者だった河谷史夫が、みすゞの詩の発見の経緯を矢崎より聞き、「よみがえる幻の童謡詩人、大正時代の“若き巨星”金子みすゞ、半世紀ぶり全作品を発見」と題して1983年12月14日付新聞に記事を掲載した。これが、1984年（昭和59年）2月の全集刊行への助走となった。

JULA出版では、全集とほぼ同時に、矢崎によって選ばれた選集『金子みすゞ童謡集「わたしと小鳥とすずと」』も出版した。全集3巻を編纂したことにより、矢崎は日本児童文学特別賞を受ける。選集は、その後も『明るいほうへ』（1995年、平成7年）、『このみちをゆこうよ』（1998年、平成10年）と題して回を重ね出版された。この間矢崎は仙崎などで金子みすゞを知る人から聞き取り調査を詳細に行なった。その集成として、彼は1993年（平成5年）『童謡詩人、金子みすゞ

教科書に入った金子みすゞの童謡詩

の生涯』と題してみすゞの伝記を出版した。これは日本児童文学学会賞を受賞した。

この矢崎の業績とみすゞの詩集が、1993年（平成5年）4月に、毎日新聞の書評欄と朝日新聞の「天声人語」欄に取り上げられた。12月には朝日新聞が「それから一金子みすゞの恋人たち」と題する記事を五日間にわたって連載した。また、1994年（平成6年）4月には『プレジデント』『詩とメルヘン』に、5月には『週刊女性』にも記事が載った。この伝記や新聞連載記事を土台にして、TVがみすゞの生涯や、その詩を放映した。1994年（平成6年）、日本テレビ系が「知ってるつもり」でとりあげ、1995年（平成7年）NHKが「こころの王国、童謡詩人金子みすゞの生涯」として放映した。

週刊誌やTVと並行して、金子みすゞの生地長門市では、全集が刊行された1984年から、一連のイベントを継続的に行っている。その主なものは次の通りである。

1984	昭59	詩碑「露」の建立 絵入りはがき発売
1985	昭60	童謡コンサート開催 ながとふるさとまつりで「みすゞ資料展」開催 みすゞの歌のカセットテープ発売
1988	昭63	みすゞとのふれあい「仙崎八景めぐり」大会
1989	昭64	没後60年記念行事
	平成	みすゞの心のふるさと展 テレホンカード発売
1991	平3	みすゞフェスティバル 詩碑「大漁」とみすゞ胸像建立 みすゞ通りの標柱完成
1992	平4	金子みすゞ記念館 開館
1994	平6	仙崎駅に「みすゞ館」オープン (山口県長門市公式サイトホームページより)

(3) 再発見者、矢崎節夫の人生観

矢崎は、金子みすゞの全集と選集を1984年（昭和59年）に、評伝を1993年（平

言語科学研究第8号（2002年）

成5年）に出版したあと、1999年（平成11年）に金子みすゞの詩を解説した『金子みすゞ、こころの宇宙』を出版した。子ども向けに書かれた、この書物の中で、彼はこう述べている。

人が幸福に生きていくために、一番大事なことは、なんなのでしょう。自分を大切にすること、自分と同じように人をも大切にすること、だれも傷つけないということ、誠実さ、公平さ、いのちのつながり、ありのままに見ること・・・人それぞれによって一番大切なことはちがうでしょう。

学校とは、先生がそれぞれに一番大切なことをくり返しくり返し、語り伝えていくところだと思います。その大事なことを実感し、心の糧として生かしていく一つの過程として勉強はするのです。とても幸運なことに、みすゞさんが甦ってくれたおかげで、未来のある人たちが大事なことの一つに出会えるようになりました。小学国語の中に『わたしと小鳥とすずと』がとりあげられたからです。（中略）『みんなちがってみんないい』とは、『あなたはあなたでいいの。』『いてくれるだけで100点満点』ということです。（p182）

子どもに語りかける大人の常として、矢崎は詩の鑑賞の際に人生如何に生きべきかの問題を提起しようとする。つまり、人間として大事なことは何かと説きはじめ、それは「自分を大切にすること」と「人をも大切にすること」だと子どもたちに呼びかける。さらに、みすゞのおかげでこの大事なことに気づくことができたと言っている。それは「みんなちがってみんないい」という言葉からであるという。その真意は「あなたはあなたでいいの」という意味であると強調している。「みんなちがってみんないい」のだから、この詩を読んでいる読者である子ども一人一人も他の人と違ってよい。重要なのは、自己と他者を共に大切にす姿勢であり、自己評価を高く持ち、誇り高く生きていくことだと言う。矢崎は、みすゞの詩の解説を通じて自らの人生観を語り、子どもたちが同じ人生観に立って生きていくことを期待していることが読みとれる。

（4） 宗教家、酒井大岳の警鐘

金子みすゞの詩の解釈を書物にした人に、もう一人群馬県の寺の住職である酒井大岳がいる。酒井は、1993年（平成5年）4月の朝日新聞の「天声人語」で、

教科書に入った金子みすゞの童謡詩

金子みすゞの三つの詩と矢崎節夫のことが紹介された文を読んで、初めて金子みすゞのことを知った。その後自分の寺での法話や、全国的に行っている辻説法の中に、彼女の詩を引用しながら人間の生き方を説いている。彼は「わたしと小鳥とすずと」という詩について、次のように述べている。

「みんなちがってみんないい」というところが子供たちに人気がある……その気持ちがよくわかります。点数がとれれば「りこう」、とれなきゃ「ばか」、こんな時代がいつまで続くのでしょうか。このへんで大人がよほどしっかり考えないと、これから生まれてくる子供たちはかわいそうです。点数では人ははかれません。「りこう」と言われた子が無責任で不親切で、「馬鹿」と言われた子が責任感強く親切であったらどうするのでしょうか。それでも点数を多くとった方が「いい人間」なののでしょうか。(中略)「みんなちがってみんないい」どころか、今の教育は「みんな同じでみんなだめ」……それで青少年の非行が増えた、事故が増えた、なんて言ってみても、もう間に合わないのです。(『金子みすゞの詩を生きる』1994年、平成6年、p189)

酒井は宗教家としての立場から、現代の教育を点数主義、学力偏重ととらえ、その結果としての青少年の非行や事故を憂える。これに対して、人間としての責任感の重要さ、親切な心を強調し、現代の教育の画一化に異を唱えるために、「みんなちがってみんないい」を引用している。

彼によれば「みんなちがってみんないい」という文は、一人一人は違うから、一人一人の個性を尊重し、学校教育における画一的な学力偏重主義を即刻やめなければ、社会的に大変な時代になる、いや、もうすでになっている、という警告として意味づけられている。酒井は、みすゞの詩を引用して日本の学歴社会への警鐘を鳴らしているのである。

3. 教育現場における詩の理解

(1) 教科書に掲載された金子みすゞの詩

1996年(平成8年)から、4社による国語教科書の掲載、1社による道徳副読本への掲載が行われた。1995年(平成7年)までのブームが各社による教材選択に大きな影響を与えたものと思われる。以下の教科書と副読本がそれである。

言語科学研究第8号（2002年）

『小学国語三上わかば』光村図書出版
 『小学国語四上』東京書籍
 『小学国語五下』学校図書出版
 『小学国語五下』教育出版
 『小学道徳 生きる力6』大阪書籍

内容の一覧は、次の通りである。

教科	出版社	学年	内 容
国語	光村図書	3上	詩「わたしと小鳥とすずと」
	東京書籍	4上	詩「ふしぎ」
	学校図書	5上	詩「わたしと小鳥とすずと」
	教育出版	5下	ノンフィクション「みずぐ探しの旅ーみんなちがって みんないいー」（矢崎節夫）の中に「わたしと小鳥とす ずと」「大漁」「つゆ」の3詩
道徳	大阪書籍	6	詩「わたしと小鳥とすずと」

5社の内、4社が「わたしと小鳥とすずと」を掲載している。同じ詩人の作品を教科書が一齐に選択したのは、各教科書会社がブームに乗り遅れまいとして掲載を急いだ結果と見える。しかし、それにしても、「わたしと小鳥とすずと」に、教科書編集者たちの選択が集中したわけは何であろうか。次に、日本の相当数の小学校の3年生、5年生、6年生に親しまれ、おなじみとなったと考えられる、この「わたしと小鳥とすずと」という詩に焦点をあてて考察する。

わたしと小鳥とすずと
 私が両手をひろげても、
 お空はちっとも飛べないが、
 飛べる小鳥は私のように、
 地面を速くは走れない。
 私がからだをゆすっても、
 きれいな音は出ないけど、
 あの鳴る鈴は私のように、
 たくさんな唄は知らないよ。
 鈴と、小鳥と、それから私、
 みんなちがってみんないい。

教科書に入った金子みすゞの童謡詩

(2) 教科書、道徳副読本の解説と指導書

この詩の教科書本文の解説と指導書に、目を通してみる。編集者や解説執筆者から読者へのメッセージが込められていると思われる、この詩の主題に関する説明文を、一覧表にして整理してみよう。

出版社名	教科書本文内の解説	指導書に書かれた詩の主題
光村図書 3年	声に出して読もう。じんとする ようなうれしい一行が、詩の中 にきらりと光っているね。 (p22)	世の中一つ一つのもものが皆それぞれ 違っていて、それぞれの良さをもって いる。(作者の発見と喜び) (p44)
教育出版 5年	みすゞはこの世に存在するもの すべてのものがそれぞれち がうからこそすばらしく一人 一人がちがうからこそ大切で、 すてきなのだということを、こ んなふうにくたってくれてい ます。(p117) (この矢崎節夫の文のあとに 詩を掲載している。)	(詩の主題に関しては明記せず。)
学校図書 出版5年	詩のみ掲載 (p98)	すぐれた個性や幸せをだれもが持ち 合わせているものだ。自分を他と比べ るとき短所や不十分なものがまず、目 につきやすい。だからわが身の不幸を かちやすい。本当は何者にもかえが たい特色、すぐれたものを持ち合わせ ているのだ。 (p156)

光村図書の教科書の場合、本文の解説の「じんとするようなうれしい一行」とは、どの行を指しているのだろうか。指導書中にある「それぞれのよさ」に対する「作者の発見と喜び」という示唆に従って読めば、「みんなちがってみんないい」を指しているのは明らかである。この主題説明は臨教審中の「自分とは異なるもの、異質性、多様性への寛容の心」を育成する目標によく対応する形で書かれていることは明らかであろう。

教育出版の場合は、本文全体が矢崎節夫のノンフィクション「みすゞ探しの旅ーみんなちがってみんないい」という文で、詩はその中に紹介された形になって

言語科学研究第8号（2002年）

いる。矢崎のいうように「この世に存在するものすべてのもの」など、金子みすゞはうたっていない。ことりと鈴と私の三者がすべてである。それも詳細に読めば、「わたし」のことしか述べていないということはすぐわかる。「全人類的視野、地球的視野」（『文部時報』p99）を児童に持たせたいという気持ちがこのような解説になったのであろうか。

学校図書出版の場合、指導書の解説は「すぐれた個性や幸せをだれもが持ちあわせている」とうたっている。金子みすゞの詩は「わたし」の幸せをうたっているのであって、他の人もみんな「だれでも」とは、うたっていない。この解説文全体が、児童の人格形成に重点をおいた記述となっている。

さらに、大阪書籍の道徳副読本『生きる力6』にもこの詩が掲載されている。指導内容には「個性の伸張」と書かれていて、詩の横には「考えてみよう」として、小鳥、すず、わたしのそれぞれのいいところ、自分のいいところ、友達のいいところ、「みんなちがってみんないい」という言葉の意味を、それぞれとりあげている。

山口県長門市のホームページには、次のように具体的な「道徳」の学習活動が掲載されている。

1. 友達のことがうらやましいなあと思った経験を発表する。
2. 「わたしと小鳥とすずと」を音読する。
3. みすゞさんが、この詩にこめた気持ちについて話し合う。
 - ・みすゞさんが、小鳥や鈴を見ていいなあとしたこと。
 - ・みすゞさんは自分のことをどう思っているのか。
 - ・みすゞさんが伝えたかった気持ち。
4. 自分のいいところ、友達のいいところに気づく。
5. 「わたしと小鳥とすずと」を歌う。

そして、主眼として、「一人一人はみんなそれぞれに良さがあり、他人とは比べることができない大切な存在であることに気づかせ、自分に自信を持つと共に、友達の良さを認め、お互いに助け合って行こうとする気持ちを持たせる。」とあげている。（山口県長門市ホームページ「金子みすゞ」2000年4月）

ここでも「自分に自信を持つ」ことに、「友達の良さを認めること」を付け加え、他への視点を重視している。特に道徳の教材として扱われた詩は、「公共の

教科書に入った金子みすゞの童謡詩

ために尽くす心、他者への思いやり」「自分とは異なるもの、異質性・多様性への寛容の心」などを育成するための教材として解釈されていることが見てとれる。

(3) 「個性尊重」の国語の授業

今度は小学校の国語の授業で、この詩を読んだ子供たちの感想を見ておこう。山口県の小学校教師、藤本哲城は、自分が行ったこの詩の授業の展開を記録している。藤本は、授業に先立ってまず、学級文庫の中に童謡集「わたしと小鳥とすずと」を入れた。そのうえ詩集から「わたしと小鳥とすずと」の詩一篇を抜き出して教室内の掲示板に大きく掲示し、常にクラスの児童の目に触れるようにしたのである。

授業は、次のように展開されている。一時間目は音読の後、絵で場面の様子を表す活動をさせる。二時間目は、再度音読させた後、お互いの感想を話し合う活動をさせる。その話し合いの中で、児童たちは次のような感想を述べている。

- ・みすゞさんは「みんなちがってみんないい」が一番好きだったと思います。この言葉は楽しいことやうれしいことが混ざって生まれ出たような感じです。
- ・「みんなちがって、みんないい」のところが一番心に残りました。それは私なりに良いところがあるんだなと思ったら、なんだか勇気や自信がもてたからです。これからも自信を持って生きたいです。（『児童心理』第53巻13号、1999・9）

前者の子どもは詩人の幸福感を感じ取り、後者の子どもは自己肯定感すなわち、ポジティブな生き方に対する共感を述べている。ところが、藤本は「考察」で、次のように述べている。

今日の学習では、話し合いの時間を十分にとった。各自の思いを語り、それをじっくりと聴き、認めあう場となっていたようである。お互いの個性の違いを認めていくことの大切さに気づき、少しずつ実践してくれればと願っている。（藤本・同上）

ここでも、教師は児童に「お互い」を認める他者へのまなざしを期待し、「多様な個性を尊重する社会」の担い手として子どもを育成しようとしているといえよう。教育目標に即した授業展開をしようとするのが、詩の主題を見誤らせる。

言語科学研究第8号（2002年）

4. 詩の言葉と道徳の言葉

(1) 「みんな」とはだれか。

これまで、教育における詩の解釈のされ方を見てきたが、このような理解は、詩の解釈として正確だろうか。この「わたしと小鳥とすずと」という詩は「一人一人がちがうということ」、つまり「みんなそれぞれにちがっていいんだ」ということを歌っているのだろうか。もう一度詩を注意深く調べてみよう。問題点は二つある。

第一は、詩の中の「みんな」とは、各指導書や矢崎が言うような、人間の子供のみんなではなく、「わたし」と「小鳥」と「すず」である。みすゞは、なぜ一見無関係なこの三つを「みんな」とまとめて呼んだのか。共通点はただ一つ「唄をうたう」ということではないか。小鳥は空を飛びながら、鈴は体をゆすりながら、「わたし」は「わたし」で、たくさんの唄（童謡、詩）を考え出す。つまり、それぞれのやり方で唄を歌うが、私は私で、詩人の道を歩きたい、これでいいんだという詩人としての自己肯定、その上にたった充足感の表現と解釈できよう。

第二に、詩の最終行は「みんなちがってみんないい」であるがそれに依存して詩を解釈してはならない。各連ごとに内容をとらえていくと、第一連で言いたいことは、私は空は飛べないが速く走れること。第二連で言っているのは、「わたし」はきれいな音は出せないが、たくさん唄を知っていることなのだから、最終行の「みんなちがってみんないい」とは、「みんな」のことを歌っているのではなくて、「わたし」は「みんな」とちがっていいんだ、「わたし」は「わたし」でこの道を行けばいいんだ、という自己肯定ととれる。

それを裏付けるように、金子みすゞ全集3巻の詩の中に「わたし」と出てくる場合は、たいてい金子みすゞその人の気持ちを言っていることが多い。つまり、「みんなちがってみんないい」というのは、「それぞれがちがう」ということを歌っているのではない。「わたし」は他の者とはちがうけれども、これはこれでいいのだ、ということである。

教育現場の多くでは、「一人一人が違うことの良さ」として、この詩の主題を規定しているが、それは臨教審の「世界の中の日本人」を育成するための重要な柱の一つである「多様な文化の優れた個性を深く理解する能力」を強調しようとするあまりに主題を歪曲したのではないだろうか。金子みすゞの詩そのものの中

教科書に入った金子みすゞの童謡詩

には、自己の内面をみつめる姿勢があるだけであり、この世の中の人々一人一人を示唆してなどいない。

この点を実際の教育現場での実見に即して論じている人に、村中李衣がいる。山口県在住の詩人、児童文学者である村中は、授業参観のため小学校に行き、金子みすゞの詩の授業を見た。そこでの教室の雰囲気や状況を次のように述べている。

うずもれていた郷土の童謡詩人として、十年くらい前から彼女のことが話題にのぼるようになって、私にはさしたる関心がなかった。ただ、小学校や中学校を訪れば、校長先生の達筆でみすゞ童謡が清書され額に入っていたり、色紙に飾られていたり。なるほど、教育現場は、「みんなちがってみんないい」のことばに敏感なんだなあ、ぐらいにしか思っていなかった。

(「研究金子みすゞ・その創作空間」『総特集金子みすゞ没後70年・文藝別冊・河出夢ムック』 2000年・p176)

村中が見たのは小学校3年生「わたしと小鳥とすずと」(光村図書)の授業である。そこでは班毎に、工夫して群読の発表があり、どの班も小鳥パート、鈴パート金子みすゞパートに別れて順番に読んでいた。

ところが、娘たちの班だけが違っていた。徹頭徹尾一人の子が読み通したのだ。そして、他の子供たちは机に顔をふせていて、一連めの「私のように」、二連目の「私のように」、そして三連目の「それから私」のところだけ、顔をあげてことばを重ねて見せた。その意表をつく表現に、教室は大笑い。しかし、班の子供たちはおおまじめで、「この詩はみんなで読まんほうがいいと思いました。」「みすゞは、私のように、私のようにって、ずっと自分のことを考えてるような気がするから。」「小鳥やら鈴やらの気持ちも声も聞こえんから、みすゞの声だけでやったほうがええと思いました。」・・・(中略)詩や小説に比べ寓意性が強く個人の表現とは言い難いとされる童謡をあえて表現ジャンルに選び、その中にひっそりとしのばせた「私へのこだわり」こそ、みすゞ童謡の魂だったのかもしれない。(同 p179)

子供たちの解釈「ずっと自分のことを考えてる」というのは、村中李衣のいう「私へのこだわり」と響きあうものだった。

この村中の指摘をさらに分析する形で、「みんなちがってみんないい」を、「他者との対立点」を含むものとしてとらえる人に詩人長谷部奈美江がいる。長谷部

言語科学研究第8号（2002年）

は「彼女は『みんなちがって、みんないい』とお札のように繰り返す人たちとは違って他者との対立点がちゃんと見えていた」（「みすゞと『わたし』」『総特集 金子みすゞの没後70年・文藝別冊・河出夢ムック』2000）と、詩人の「こだわり」の構造をときあかしている。

みすゞの詩の中の「わたし」とは、詩を書くことによるのみ、自分自身の存在を自覚している当の本人であり、「みんなちがってみんないい」とは、みんなの生き方のことを言っているのではなくて、「わたし」自身の生き方を言いたいために使った言葉なのである。すなわち「みんなちがってみんないい」とは、違ったみんなの多様性や個性を認め合おうという意味で使っているのではなく「みんなと違う自分を貫いて生きる」という詩人自身の自己意識、自己肯定の意志であることを、村中も長谷部も指摘しているのである。

教育現場では、みすゞの詩の「みんなちがってみんないい」が、詩人の強烈な自己意識の表れにほかならないことを軽視している。教科書本文中の解説や、指導書の主題、また道徳副読本もすべて、「人はみんなそれぞれに良さがある」ということを主張する詩として解釈している。

(2) 合言葉になった「みんなちがってみんないい」

今日の学校教育は、画一性を破り、何とか個性化、多様化を推進しようとしてきた。同時期、再発見された金子みすゞの詩のうち、「わたしと小鳥とすずと」が、矢崎によって選集の題名に選ばれた。この詩は、単純なリズムとわかりやすい言葉で多くの読者の共感を呼んだ。

1996年の教科書への採用前後、この詩はとりわけブームの渦中にあった。『プレジデント』（1994.4）、『週刊女性』（1994.5.3）、『Number』（1995.10.12）、『旅の手帖』（1995.12）、『The 21』（1996.1）、『女性セブン』（1996.6）と、週刊誌がみすゞの特集を組み、その詩と矢崎の解釈などを紹介した。1995年にレナウンは「ネクストアイ」のCMで、女優、鈴木保奈美に金子みすゞの詩「星とたんぽぽ」を朗読させた。このCMと同時期にNHKスペシャルで「心の王国：童謡詩人金子みすゞの世界」が放映された。これらメディアによる、詩人の薄幸な生涯とその詩の紹介は、多くの人々の心に波紋を投げかけた。

80年代、90年代に続いて、ブームは現在までも続き、特にみすゞの故郷長門市

教科書に入った金子みすゞの童謡詩

は、その発信地としての役目を果たしてきた、同市のホームページによると次のような企画が続行されている。

- | | | |
|------|-----|--|
| 1996 | 平8 | やまぐち文学フォーラム「文学による地域づくりをめざして」と題してパネル討論会 |
| 2001 | 平13 | 長編劇映画「みすゞ」(田中美里主演)公開 |
| 2002 | 平14 | 生誕百年記念行事「みすゞの学校と全国授業inながと」10月開催予定(みすゞのまなざしによる「学校経営、授業実践を通して「思いやりの心いたわりの心」を全国に発信」
(長門市教育委員会主催) |

(山口県長門市公式サイトホームページより)

1992年(平成4年)に長門市コミュニティタウンウェーブの最上階(5階)にオープンした金子みすゞ記念館も、大きな役割を果たしている。140坪の面積を持ち、資料関係展示室、子供図書館、休憩室を備えたこの施設は、全国から訪れる人を歓迎している。展示品は遺稿集、母親宛のはがき、二十歳の時の着物のはぎれ、書店「金子文英堂」の書棚、仙崎八景の絵などである。思い出の品々は、時代に押しつぶされた一女性の悲劇と、時代を超えた一詩人の魂の軌跡を蘇らせる。

1995年までのブームに目を見張った教科書会社は、あたかも申し合わせたように、詩の単元の教材として、金子みすゞの詩「わたしと小鳥とすずと」を採用した。こうしたブームを背景に、教科書に詩が採択された途端「みんなちがってみんないい」の詩句は、詩人本来の気持ちからかけ離れ、「国際的視野」をもった「世界の中の日本人」となるための必須条件「多様な文化の優れた個性を深く理解する能力」や、「公共のために尽くす心、他者への思いやり」(『文部時報』p99)という教育目標に対応する道徳の合言葉として解釈され解説されるようになってしまったといえよう。

(3) 今日の教育目標と現状

すでに見てきたように、詩の言葉は、教育の言葉、道徳の言葉に置き換えられ、教育目標を表す言葉として歓迎され、教育現場の中での役割を果たしている。

そもそも、詩とは本来、国家や社会、旧来の価値観など、既存の枠組みによる

言語科学研究第8号（2002年）

拘束から解放を願う自由な人間の多様な言語表現である。教科書に採択される教材としての詩は、そうした多様な言語表現を反映するものでなければならない。1984年、1986年の臨教審答申で掲げられた「21世紀のための教育目標」は、現実の教育現場では、確かに「多様化」という衣を表層にまもってはいるが、その「多様化」は実は「画一的多様化」すなわち「画一化」になっているのではあるまいか。時代の合言葉は「多様化」であっても、内実は同じ詩、同じ解釈、同じ口振りで子供に「他者への思いやり」を訴えるものになっている。

現場の教育者たちは、戦後の個人主義・自由主義が、自己本位・自己中心主義を生み出し、それが近年の反社会的行動や、非人間的犯罪へのひきがねになっていると解釈したのであろう。だからこそ、その悪しき個人主義を克服するために、自己よりも「他者」つまり「みんな」への視点を説きたかったのであろう。しかしながらそれは、本来の多様化(diversification)とは、異なるものである。「思いやり」という日常道徳の価値観を利用して、異文化理解能力を涵養しようとしてもおのずから限界がある。思いやりとは身近のもの、自分と同質のものに対しては作用するものだが、全く異質のものに対しては、しばしば排除攻撃の姿勢を取ることがある。思いやりや同情を教えこむことではなく、異質な相手との交わりの中での、インタラクティブなかかわりこそが、真の国際人を作る鍵であり、多様化への道といえる。

*

本稿ではこれまで、詩の解釈という鏡に映った今日の日本の教育の、現実の姿を見ようとした。金子みすゞの詩の一節は、教育目標推進という時代の需要に応じて広く流布され、教育者らによって、「独特の」解釈を施されて、現代日本に流通することとなった。そこには、画一化を脱し、個人の尊厳を前提として、個性の尊重を重視し、教育における多様化を推進しようという教育政策を掲げながら、現実には、国家的教育目標推進に拘束され、真に自由な個人として自己と社会を見つめ判断し、主体的に現実を解釈し、自分の言葉でコミュニケーションする姿勢を見失おうとしている今日の日本の教育の姿が映し出されているといえるだろう。

教科書に入った金子みすゞの童謡詩

本稿作成にあたっては神田外語大学の山領健二先生と、次の機関にお世話になりました。厚くお礼申し上げます。

神田外語大学異文化コミュニケーション研究所・国立国会図書館・山口県長門市教育委員会・大宅壮一文庫・教科書図書館

参考文献

- 大越和孝「金子みすゞの世界」（『教育科学国語教育』1996年4月～99年3月）明治図書
金子みすゞ『金子みすゞ全集Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』JULA, 1984
金子みすゞ『わたしと小鳥とすずと』JULA, 1984
金子みすゞ『明るい方へ』JULA, 1995
金子みすゞ『このみちをゆこうよ』JULA, 1998
香山健一『自由のための教育改革』PHP, 1987
川端未人・多田孝志編『世界に子どもをひらく—国際化時代の教育シリーズ』創友社, 1990
古賀鈴鳴「ふしぎな世界へ」（『総特集金子みすゞ没後70年・文藝別冊・河出夢ムック』29頁）河出書房新社, 2000
酒井大岳『金子みすゞの詩を生きる』JULA, 1994
鈴木孝夫『言葉の人間学』新潮文庫, 1981
高遠信次『詩論・金子みすゞ』東京図書出版界, 1999
田中圭治郎・奥川義尚・小島勝・川村覚昭『国際化社会の教育』昭和堂, 1990
中山治『ぼかしの心理』創元社, 1989
長谷部奈美江「みすゞと『わたし』」（『総特集金子みすゞ没後70年・文藝別冊・河出夢ムック』19頁）河出書房新社, 2000
バンクス, J.（平沢安政訳）『多文化教育』サイマル出版会, 1996
バーランド, D. C.（西山千・佐野雅子訳）『日本人の表現構造—公的自己と私的自己』新版，サイマル出版会, 1979
藤田英典『教育改革』岩波書店, 1997
藤本哲城「金子みすゞを読む」（『児童心理』53巻13号, 1999年9月, 75～79頁）金子書房
古田暁・石井敏・岡部朗一・平井一弘・久米昭元『異文化コミュニケーションキーワード [新版]』有斐閣, 2001
ベネディクト, R.（長谷川松治訳）『定訳菊と刀（全）』社会思想社, 1967
村中李衣「研究金子みすゞ・その創作空間」（『総特集金子みすゞ没後70年・文藝別冊・河出夢ムック』176～179頁）河出書房新社, 2000. 1
臨時教育審議会「教育に関する第二次答申」（『文部時報』1327号, 1987・8）
Agar, Michael. *Language Shock*. Quill, 1994.
Edwards, John. *Multilingualism*. Penguin, 1994.

言語科学研究第8号（2002年）

- Moeran, Brian. "Japanese Language and Society." *Journal of Pragmatics*. December 1988.
Moeran, Brian. *Language and Popular Culture in Japan*. Manchester University Press, 1989.
Spolsky, Bernard. *Sociolinguistics*. Oxford, 1998.